

# 対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(22)

## TEA(複線径路・等至性アプローチ)から見たキャリアの捉え方 注1

サトウタツヤ・川本静香

### 1 径路としてのキャリア

キャリアという概念であるが、私見によれば、能力的に捉える考え方と経験の総体として捉える考え方が存在する。そもそも、日本ではカタカナでキャリアと書いた時の原語は二つある。1つは **carrier** でありもう1つは **career** である。前者は何かを持つ、運ぶという意味に近く、運輸業や空母がキャリアと呼ばれることや、携帯電話などの回線業者がキャリアと呼ばれること、さらにはキャリアバッグなどの連想から、人口に膾炙している。後者についてはキャリア官僚やキャリア形成などの用例があるものの、このキャリアが **career** であって **carrier** とは異なる語だということが一般的に良く知られているとは思われない。

キャリア官僚と言う時のキャリアは前述のように **career** である。この語は後に述べるように経歴という理解が最も正しいと思われるが、日本では国家公務員におけるキャリア（国家公務員I種試験等に合格した幹部候補生の俗称＝エリート）という語のイメージが強く、アタマの良い人＝知的能力がある人、と理解されていることも多い。この場合のキャリアの対義語はノン・キャリアであり、キャリアが経歴であるとは理解しづらい要因を作っている（能力であればノンをつけても意味は通じるが、経歴だとすると経歴が無いということが理解しづらい）。

繰り返すが、キャリア官僚やキャリア形成という語のキャリアの原語は **career** であり、経歴なのである。この語はラテン語の **Carraria**（馬車などの乗り物の通り道＝轍）が語源であることを知るとそのことはよく分かる。轍という意味から経歴とか資格という意味に転じていったのである。詩人・高村光太郎がその詩「道程」において、「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」と高らかにうたいあげたが、これはまさに **career** としてのキャリアを表現したものに他ならない。曲がったり迷ったりしても、自分が歩いてきた道こそがキャリアなのである。厚生労働省が2002（平成14）年7月に発表した「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書においてキャリアは「一般に「経歴」、「経験」、「発展」さらには、「関連した職務の連鎖」等と表現され、時間的持続性ないし継続性を持つ

た概念として捉えられる」とされている。

さて、キャリアを経歴として捉える大前提は職業選択の自由とある種の流動性である。たとえば日本の江戸時代（封建制）においては国民の8割が農民であったし、幕府の重要役職（将軍や老中）は世襲制であった。このような時代においてキャリアを考える意義はないことは明らかであり、キャリアを考えるのは極めて近代的な出来事であることがわかる。心理学史に目を転じれば、職業指導のカウンセリングという形で職業生活に関心がもたれるようになったのは、アメリカ・ボストンに職業指導室が設置されカウンセリングが行われたのが嚆矢である（1908）。その後、スーパーが独自のキャリア発達理論の考案に至った。彼は、職業の発達ではなく、キャリアの発達という考え方を重視し（Super, 1980）、ライフ・キャリア・レインボーというアーチ型のキャリアの捉え方を提唱した。

## 2 プロセスとして理解するものとしてのキャリア；デザイン・ドリフト・トランジション

キャリア概念には様々な広がりが見られるが、若林（2006）によるとキャリア概念は以下の4つに分類される。

- 1 昇進や昇格の累積
- 2 医師・教授・法律家・聖職者など伝統的な専門職従事者
- 3 生涯を通じて経験した一連の仕事
- 4 職業に限らず個人が経験した社会的役割や地位の系列

これらの定義はいずれも、キャリアを時間軸の上で連続的なものとして捉えていることがわかる。Herr & Cramer (1984) も、キャリアの見方について、Super の職業的発達理論の提唱をもって、静態的（スタティック）な「職業(Occupation)モデル」から動態的（ダイナミック）な「キャリアモデル」へ変貌を遂げたと評価している。

キャリアが、職業の獲得やその遂行ではなく、人生上の一連の流れとして位置づけられるのであれば、その移行も問題になる（Transition＝トランジション）。また、よりよい移行を可能にするための準備や支援も必要となってくる（Design＝デザイン）。ただし、こうして準備したものが必ずしも首尾良く実現されるとも限らないし、ましてや準備をしていなければ、周囲にながされるだけになってしまう（Drift＝ドリフト）。

かくして、キャリア・トランジション（移行）、キャリア・デザイン（計画）、キャリア・ドリフト（漂流）ということが、キャリアの実践や研究で重要な概念として注目されるようになってきたのである。これらの概念は、キャリアを社会や会社が決めるのではなく個人の側が決めるという意味も含まれている。キャリア・ドリフトにしても、流されるといって消極的な意味が大きくなるが、流れに乗っているという意味の積極的な意味も

ある。金井（2002）は、キャリア・デザインにおけるデザインは節目節目のことであり、実際には、ドリフトしていることもあるし、そこには積極的な意味もあるとしている。なお、トランジションには、「フルタイムの 学校教育を修了して、安定的なフルタイムの職につくこと」という限定的な定義もある（溝上・松下 2014）。この場合には、学校／学生という状況から社会／労働者への移行に特に焦点が当てられていることになる。

金井（2002）がその執筆中に直接会って話を聞くことでその考え方に影響を与えたのが、クランボルツ（Krumboltz and Levin, 2004）による計画された偶発性理論（Planned Happenstance Theory）である（金井、2010）。計画された偶発性理論とは、キャリア形成の実に8割までが偶然に起きた出来事によって差配されると考える考え方で、これにはクランボルツ自身の人生経験が投影されている。すなわち彼は、心理学者になるにあたって、全く計画などしておらず、「専門を決めないと退学だ」という警告を受け取った時に、当時熱中していたテニスのコーチに専門の選択を相談したのであるが、そのコーチが心理学を専攻していたため、クランボルツ本人も専攻を心理学に定めたというのである。その後の彼がたゆまぬ努力をして大学教授の職を得たことは想像に難くないが、その選択においては偶然が支配していたということを彼は強調したいのである。

### 3 TEA プロセスを理解して記述する質的研究法

キャリアを主体的で時間的に連続するものとして捉えるのであれば、そのトランジションをどのように捉えればよいだろうか？従来は、職業に対する適性を調べるために、一種の適性検査が開発され、結果として、キャリア適性は内的で能力的なものとして見なされがちであった。こうした見方は、プロセスとしてのキャリアを捉えるためには不十分であることは論を俟たない。プロセスを描く研究法が必要となる所以である。そして、そこで使用する研究法は、デザインもドリフトも偶然の示唆も描くことが可能であることが望ましい。

TEA（複線径路等至性アプローチ）は「複線径路等至性モデリング（TEM）」、「歴史的構造化ご招待（HIS）」「発生の三層モデル（TLMG）」を統合・統括する考え方である（Sato, Yasuda, Kanzaki & Valsiner, 2014）。TEAのフラッグシップ（旗艦）にあたるのがTEMである。TEMはヴァルシナー（Valsiner）が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性（Equipfinality）概念と複線径路（Trajectory）概念を取り入れようと創案したもので、人間の経験を時間的変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、その多様な径路を記述するための方法論的枠組みである（サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー、2006）。

TEAについては既に10年以上の時間的積み重ねの中で日本語英語で様々な文献を読むことが可能であり（サトウ、2009；安田・滑田・福田・サトウ、2015a, b；安田・サトウ、2017印刷中）、本稿ではTEMに絞って、キャリア研究との接点を論じておきたい。TEMには様々な概念ツールが有り、それを用いて人生の径路を描くことが可能である。

非可逆的時間・分岐点・等至点・社会的助勢・社会的方向づけについて簡単に説明して

おこう。このうち、非可逆的時間・分岐点・等至点の最小のユニットとなる。

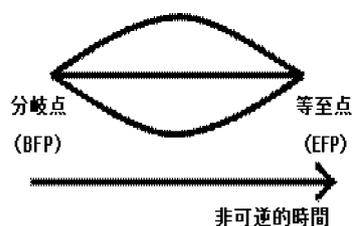


図1 TEMの基本ユニット

非可逆的時間は、時間は決して後戻りしない持続的なものとして捉える考え方であり一時間について他の捉え方もあるとはいえ、TEMの根幹をなす時間の捉え方である。

分岐点は、選択肢が現れる時点であり、そのことについて時間が発生する時であり、記号の内化ポイントでもある。つまり、分岐点は経験が分かれるポイントであり、等至点は経験が収束するポイントである。分岐がなければ複線径路もないし、結果として等至点という概念も必要ではなくなる。また、分岐点において複数の選択肢が現れることになるが、その際に、自分が望む方向へ支援してくれる様々な力を社会的支援(SG)として表し、自分が望む方向から遠ざけようとする様々な力を社会的方向づけ(SD)として表す。SGやSDは、最終的な等至点に対する相対的なものであるから、クランボルツによる計画された偶発性理論が扱うような、その時点においては本人にも意味づけが分からないような「偶然」の出来事なども径路を描く時にうまく取り込むことが可能になる。

#### 4 キャリア研究とTEA

キャリア研究とTEAの接点は大きく二つに分かれる。一つはある個人の職業生活(特に専門職)のあり方を時間とともに見ていく研究である。教師、看護師、など一専門職に就くことだけがキャリアではないことは前述した通りだが、こうした専門職を全うする人生のあり方を描くことがキャリア研究に資することは言うまでもない一専門職に就いた人々が、その人生において、専門性との格闘を通じて人生を紡いでいく様子をモデルとして描くものである。もう一つが、キャリア・デザインやキャリア形成の支援にTEAを用いるというものである。

前者については、TEAを用いた多くの研究が当てはまり、枚挙にいとまがない。保育者の成長プロセスに焦点をあてた香曾我部(2012)の研究、サッカー指導者が海外での貢献事業に参加した際の経験を描く松山・土屋(2015)の研究、心理臨床家の成長モデルを描いた上倉ら(2016)の研究、大卒新人看護師の臨床1年目の経験のプロセスを可視化した山本・中本(2017)の研究、日本語教師の海外教育経験と教師としての成長について異なる2

つのモデルを描いた北出（2017；印刷中）の研究がある。

後者については、デザインという語が文化心理学にとって重要な意味を持っていることも指摘しておく必要がある。デザインの語源はデッサン(dessin)と同じく、“計画を記号に表す”という意味のラテン語 *designare* なのである。いくつかの研究を紹介しておく。キャリア・カウンセリングに TEA を組み込むことでキャリア・アイデンティティ・ワークを提案する番田（2015）の研究、社会人がビジネススクールで学ぶことに焦点をあてた豊田（2015）の研究、ある大学の情報系学部のゼミ出身者の在学中ならびに社会における能動的学習者として振る舞いながらのキャリアの軌跡を描いた岸・久保田（2017）の研究、人材開発論の講義やアクティブ・ラーニングに TEA がもたらす効果を考察した加藤（2017）の研究、などがある。

現在の日本では、高校卒業後、何らかの上級学校への進学が8割以上となっており、大卒後のキャリアや就職後のキャリアのあり方に注目があたりがちである。また、社会人が大学院に進学した際のキャリア形成にも注目が集まりつつある。一方で、高校を卒業して社会に出る人々のキャリアについての研究は少なく、今後取り組まれる必要がある。また、人生の初期における社会的不利をどのように回復していくのか、というような研究もキャリア形成の研究として取り組まれていく必要があるだろう（河合・窪田・河野（2016）の研究はこうした側面に光を当てている）。適性や能力を測定するのではなく現実に存在する（実存）個々人のキャリアのあり方についてモデルを作って理解することが当人はもとより後続の人々の参考になるような研究が、TEA によってなされる必要があるのである。

注1 本稿は2017年6月9日（金）法政大学・キャリアデザイン研究会での講演のために準備した内容を元に執筆されたものである。

## 文献

- 番田清美(2015). キャリア・アイデンティティ・ワーク. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)(2015), TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する—, 新曜社 229-239.
- Herr, E. L. dan Cramer, S. H. (1984). *Career Guidance and Counseling Through the Life Span: Systematic Approaches*. Boston: Little, Brown & Company.
- 上倉安代・齊藤翔悟・佐藤真理奈・野村規雄・入軽井悦子(2016). 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析— 立正大学臨床心理学研究, 14, 41-54. (Retrieved from [http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11266/5739/1/bulletin14\\_p041\\_kamikura\\_etal.pdf](http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11266/5739/1/bulletin14_p041_kamikura_etal.pdf))
- 金井壽宏(2002). 働くひとのためのキャリア・デザイン PHP 新書
- 金井壽宏(2010). キャリアの学説と学説のキャリア 日本労働研究雑誌, 52, 4-15.
- 加藤雄士(2017). TEA を活用した アクティブ・ラーニングに関する一考察 (1) 人材開発論の講義における TEA の活用事例 ビジネス & アカウンティングレビュー, 19,

- 97-115. (Retrieved from  
[http://www.kwansei-ac.jp/iba/journals/review/BandA\\_review\\_vol19\\_p97-115.pdf](http://www.kwansei-ac.jp/iba/journals/review/BandA_review_vol19_p97-115.pdf))
- 岸磨貴子・久保田賢一(2017). 大学のゼミ活動とキャリア形成：卒業生のライフストーリーから 情報研究：関西大学総合情報学部紀要, 45, 1-22. (Retrieved from  
<http://hdl.handle.net/10112/10897>)
- 北出慶子(2017 in press). ネイティブ日本語教師の海外教育経験は、教師成長を促すのか？  
 安田裕子・サトウタツヤ(2017 in press) TEMでひろがる社会実装；ライフの充実を支援する 誠信書房
- 香曾我部琢(2012). 小規模地方自治体における保育者の成長プロセス—保育実践コミュニティの形成プロセスに着目して— 東北大学大学院教育学研究科『研究年報』, 60,125-152 (Retrieved from  
<http://www.sed.tohoku.ac.jp/library/nenpo/contents/60-2/60-2-08.pdf>)
- Krumboltz, J. and Levin, A. S. (2004) . Luck is no accident: Making most of Happenstance in your life and career. Impact Publishers. (花田光世・大木紀子・宮地夕紀子 (訳) (2005) . その幸運 は偶然ではないんです！ ダイヤモンド社)
- 河合直樹・窪田由紀・河野荘子(2016). 児童自立支援施設退所者の高校進学後の社会適応過程—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析— 犯罪心理学研究, 54, 1-12.
- 松山博明・土屋裕睦(2015). 海外派遣指導者の異文化体験とレジリエンス：アジア貢献事業による初めて赴任したサッカー指導者の語りから スポーツ産業学研究, 25, 231-251.
- サトウタツヤ(2009). TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして 誠信書房
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン=ヴァルシナー (2006). 複線径路・等至性モデル - 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究,5, 255-275.
- Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J. (2014) From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B., Chaudhary, N. & Hviid, P. (Eds.) . Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key (p. 93-104) . Information Age Publishing.
- Super, D. (1980) . A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-296.
- 豊田香(2015). 専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業的アイデンティティの形成：TEA 分析と状況的学習論による検討 発達心理学研究, 26, 344-357.
- 若林満(2006). 組織内キャリア発達とその環境 経営行動科学, 19, 77-108. (Retrieved from  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaas1986/19/2/19\\_2\\_77/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaas1986/19/2/19_2_77/_pdf))
- 山本純子・中本明世(2017). 新人看護師が臨床 1 年目の経験を通して活用した看護基礎教育の学び—学士課程卒新人看護師の 3 事例 日本看護医療学会雑誌, 19, 13-20.

安田裕子・サトウタツヤ(2017 in press) TEMでひろがる社会実装；ライフの充実を支援する 誠信書房

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015a). ワードマップ TEA 理論編 複線 径路等至性アプローチの基礎を学ぶ 新曜社

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015b). ワードマップ TEA 実践編 複線 径路等至性アプローチを活用する 新曜社

#### 報告書

厚生労働省 (2002). 「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書 2002 (平成14) 年7月。(Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3.html>)